チイ子

上田貞美

K君が朝二階から起きてくると、猫のタマが庭で何かにじゃれているのを見つけ、

「お姉ちゃん、タマが何かにじゃれているよ」

といいながら庭に出て、もみじの木の下に行く。

「たいへんだ、早く来てよ。お姉ちゃん。タマをおさえてよ、僕一人じゃだめだよ」

と応援を求めている。

「どうしたの」

と言いながら、姉も庭に出て行った。

「はなしなさい」

と姉にいわれて、タマは素直にはなした。二人は一羽の子雀を、大事そうに両手で持って来た。台所にいた母親は、そっと受けとって見つめた。まだ嘴の両わきに黄色のやわらかい所がついている。眼は小さく黒く瞬いている。K君が小さな傷を見つけた。タマにでもやられたのかも知れない。その傷にマーキュロをつけた。

「前にも子雀にお水をやったけれど、なかなか口をあかないよ。子雀を育てたと言うことを聞いたことがないしね」

と母親はためらった。しかしそんな事を言っても、現実はこの子雀のいのちを守ることにある。そこで母親は考えた。ちょうど、うずらにやるすり餌が家にあることを思いついた。

K君と姉は心配そうに、母親の動作を注意深く見まもっている。

「うずらにやる時よりも、少し水を多くして、ほんの少

し作ってちょうだい」

と、母親は子どもたちに言うと、つまようじの太い方を平らに削って、小さな、小さなお匙のようなものを作った。削った面は子雀の嘴の両側にある、黄色いやわらかなところを痛めないように、角を落し滑らかにした。左手で子雀のからだをそっと持ち、右手で小さな手製のお匙にすり餌を少しのせると、口もとに近づけたが、やっぱり口をあけようとしなかった。そこで、嘴の黄色いやわらかいところから、そっと小さなお匙を入れたら、びっくりしたのか大きな口をあけた。しかしぶるぶるとあたまを左右に振ると、すり餌はパッパッとそこいらに散った。子雀がからっぽになった嘴をペチャペチャさせて、真黒い眼をピカピカさせている顔は、何ともひょうきんでかわいらしい。母親は心の中で、どうしてもすり餌をたべてもらいたいと思って、また考えた。K君も姉も、子雀の様子を見てもどかしげに立たずんでいた。

母親は、母親が子どもの頃、二羽の十姉妹が卵を産んで、次から次へふえていった時、母鳥が大きくあけている雛鳥の口の奥深くに嘴を入れて食べさせていた姿と、つばめの母鳥が、巣の中で大きくあけている子つばめの口の中深くに、餌を入れて食べさせていた姿とを思い出した。そこで今度は嘴の両わきの黄色いところから、そっと小さいお匙を入れると、大きな口をあけたので、上あごの方へ餌をなするようにしてみた。すると、すり餌をごくんとのみ込んだ。その方法で、やっと子雀は食べることをおぼえた。K君も姉も明るい表情になった。

「少し食べたからだいじょうぶだね、ママ」

とK君も安心した。そして鳥かごに水とはこべを入れ、そっと子雀を入れる。びっくりしている子雀にK君は、

「早く馴れてね」

と話しかけている。母親は餌つけに成功したよろこびで胸が一杯だった。家族が一人ふえた感じだった。赤ちゃんのように、きっと早目に餌をあげた方が良いと思ったので、三時間おきに餌をあげることにした。

○

心配した夜もあけて、五時半に朝の餌つけをする。だいぶ上手に食べられるようになった。「チイー、チイー」とかん高い声で元気に鳴く。部屋の窓ぎわにつけてある大きな机の上に鳥かごが置いてある。東に面した窓から朝日が

一杯さし込む。今日も子雀が元気に育っていくように、暖かい陽ざしが鳥かごを暖めている。

庭にも毎日十数羽の雀があそびに来る。そのほか、季節によっては、目白、しじゅうから、尾長、山鳩、ひよどり、鶯なども来て楽しませてくれる。みんなの朝食のころになると、庭の雀たちは集まって来る。「チイー、チイー」と子雀のかん高い声が聞こえるのか、庭の雀たちも、「チュン、チュン、チュチュチュ」とにぎやかに鳴く。よく見ると、庭の雀にも二、三羽、子雀がまざっている。母鳥から餌をもらっているのもいた。K君も姉も見つけて、興味深く、毎日くるのを楽しんで待っていた。

鳥かごにもなれ、すり餌も母親の手からよく食べるようになったある日、餌を食べ終ったあと、母親は子雀をつかまえている左手をそっとひらいて見た。パタパタと羽ばたいたが、母親の手から机の上におりる程度で、まだ上手に飛べない。そこで朝の餌づけのあとしばらくは部屋の中で自由に飛べるように、かごから出しておくことにした。K君と姉は、毎日母親が朝の餌つけを終えると、子雀と遊んだ。部屋の中を自由に散歩させた。まだよく飛べないので、K君は両手を少し高くして手をはなしてやると、少し飛んでピアノの上にとまったり、窓わくにとまったりする。毎日一時間ぐらい遊ばせて、またかごに入れていた。

三時間おきに餌をやらなければならないので、みんなでそろって外出する時は、箱に入れて、餌と小さい手製のお匙といっしょに風呂敷に包んで連れて歩いた。

子雀は「チイー、チイー」と大きな声で元気に鳴くので、自然と「チイ子」と呼ぶようになり、K君と姉の会話の中に、「チイ子ね」といつの間にかおり込まれていた。

○

こんな毎日が続いていたある日、南の庭で遊んでいたむれから離れた一羽の雀が、枝から枝に飛び移り、東側のもみじの枝にとまった。そして首をかしげたり、からだを左右にチョンチョン動かしたり、「チュチュチュチュ、チュチュチュチュ」と鳴いたりすると、部屋の子雀も「チイー、チイー」と鳴いて鳥かごにとまったりする。はじめは気がつかなかったが、その雀と子雀の様子を見ていると親雀のように思えてきた。それからこの一羽の雀は毎日来ては、枝から枝へ、窓に近い枝へとチョンチョン飛んでは用心深く小首をかしげ、昨日よりは今日と、様子をうかがい

ながら、だんだん近づいてくる。

窓ぎわにばらの木があって、クリーム色の花が窓ごしに美しく咲いている。親雀はそのばらの木の枝に飛びうつって来た。しかし、そうとう用心し、緊張した態度で、のび上がったりせわしく左右を向いたりしてうかがっている。しばらくしてばらの花びらを一枚くわえると、窓台に飛びのって、子雀を見てはからだを左右に、チョンチョンと振り動かしている。母親はそれを見ると、何ともいえない、母性愛ににじんだあついものを感じた。さっそくK君と姉を呼んで、そっと見るように言った。

しばらくして、ばらの花びらをくわえた親雀は、ガラス戸ごしで中に入れないので、あきらめて飛んで行ってしまった。

「雀さんのおかあさんはえらいわね。毎日何とかして子どものところに行きたいと思っていたのね」

とつぶやき、さらに、

「あのばらの花びらをくわえた時、なにか美しい絵を見ているような気したわ」

と、母親は二人に話した。姉もK君も、はじめて見た親子の愛情に、ただ胸をうたれたようだった。きっと親雀はもどかしいにちがいない、何とかしてあげなくてはと母親は考えた。

○

早速次の日は、朝の餌を食べさせ運動が終ると、子雀をかごに入れて窓をあけ、親鳥が入ってこられるようにしてみた。

「チュチュチュチュ」

「チイー、チイー」

と、チイ子と、親雀との話し合いがはじまる。親雀はいつものように、南の庭で遊んでいるむれからはなれて、チイ子にあいに来る。もみじの枝から枝へと渡り、ばらの枝まで来ると、少し小首をかしげて部屋の様子をうかがっている。今日はガラス戸があいている。窓台からチョン、チョンととびあるきをして、また小首をかしげて様子をうかがう。静かだ。たしかめるとまた、チョン、チョンと机の上まで来た。子雀のはしゃぎようといったら、「チイ、チイ」と甘えているように鳴いてはかごにつかまる。親鳥は「ここまでおいで、早く早く」とでも言っているように、しばらくその場で「チュチュチュチュ」と、くりかえし鳴

いていた。そのうちにかごのそばまで行って、窓の方へ、ふたとびしては「チュチュチュチュチュ」と鳴き、チョンチョンとまたふたとびしては「チュチュチュチュチュ」とくりかえしている。どうも「こうやって来てごらん」とでも言っているように、道案内をしているようだった。単身で家の中に入る親雀は、おそらく捨身で来たにちがいない。「そんなにこわがらなくていいのにね」と母親はK君にそっと言った。その日はそこまでであった。

次の日も親雀は、窓から机に来てかごにとまった。子雀はびっくりした。大はしゃぎだった。すると親雀は、すっと飛んで行ってしまった。しばらくすると、口に何かくわえて戻って来た。よく見ると、親雀の嘴からはみ出ている小さい蛾の羽がブルブルと動いている。親雀はかごにとまると、子雀に口うつしをした。おみやげをもって来た親雀は満足した様子だった。親雀も少しなれて安心したのか、用心しながらも、毎日何か口うつしをするようになった。あのクリーム色のばらの花びらも、やっぱり口うつしで食べさせていた。みんなは雀がばらの花を食べるのを見るのは、はじめてだった。きっと活力がつくのかも知れない。母親は、何といっても、虫類が補充できたのでほっとした。

○

母親と親雀とで育っているチイ子も、だいぶしっかりして来た。運動の時も部屋の高いところまで飛べるようになった。夏休みも終りに近づいたある日、みんなで話し合って、チイ子を親雀に戻してあげることにした。

「チイ子、今日はおかあさんとお帰り。一生懸命に飛ぶのですよ」

朝の餌つけが終ると、高く両手をのばして飛ばしてみた。バタバタと飛ぶ。羽もしっかりして来た。ひとまずかごに入れて、うち中で別れを惜しむ。朝食を済ますと、みんな送りに集まった。K君も姉も、はげましの言葉をかける。別れるのはやっぱり淋しい。チイ子も知ってか、甘えている。親雀の声がしてきた。思い切って窓をあける。親雀はもみじの枝まで迎えに来た。とりかごの入口をそっとあける。親雀がこわがらないようにはなれて見送る。いつものように、「チュチュチュチュ」と鳴いては飛びうつり、枝から枝に飛びうつるやり方を、一つ一つ教えているようである。やっと鳥かごのところに来ると、

「早くおいで、こっちだよ」

と言っているように、「チュチュチュチュ」と鳴く。二、三度くりかえし、やっとチイ子はとりかごの出口から飛び出した。親雀は丁寧に机の上をチョンチョンと小さくとび歩きをしては、チイ子を振りむく。自分の方に来そうになるとまた、窓の方へ行き、窓台で「チュチュチュチュ」とけたたましく鳴いて、「こっちにおいで」と呼んでいる。チイ子もまねて、親雀のあとを一つ一つ着実に行く。とうとう窓からばらの枝に行ってしまった。何だか、力がぬけて行くような気がした。ばらの枝から、青木の枝、もみじの木に飛びうつって行く。だんだん遠くなって行く。もみじの枝から道をへだてた隣の家の桜の枝に飛びうつった親雀は、チイ子が渋っているのを心配そうに、からだを左右にうごかしてやきもきしながら待っている。チイ子は思い切って飛んでみた。しかし足を滑らして落ちてしまった。そこへ猫のタマが飛び出した。うちじゅうで関心をもっていたので、タマも何となく庭でその気配を気にしていたようだった。

母親は急いでチイ子を探しに行った。

「チイ子、いらっしゃい」

とつかまえようとすると、親雀がけたたましく鳴くので、逃げてしまう。飛べずに、チョン、チョンととび歩きだが、早い。そのうちタマが邪魔をする。うまい具合に、チイ子は積んであった切り枝の下の方にもぐり込んだので、母親は手を入れて、やっとチイ子をつかまえることができた。チイ子を連れて部屋に戻ると、またかごの中にそっと入れてあげる。まだ無理のようだった。K君も姉も、チイ子が戻って来たので、とてもうれしかった。それに親雀に気がねがなくなったからだった。

「もっと大きくならなければ帰してあげられないよね」

K君はまたチイ子と遊べると思った。

○

それから一週間ほどして、日曜日に巣立たせてあげようと話し合った。K君は

「次の日曜日にしてよ」

と言って、少しでも別れる日を伸ばそうとした。

その日曜日は意外に早くきてしまった。

「チイ子、元気でね」

「さよなら」

「また毎日遊びに来てね」

「チイー、チイー」

その日も部屋の中で遊ばせてみた。少し力強くなったようだった。かごに入れ、みんで別れを惜しむ。親雀の声が庭の方でした。窓を思い切ってあける。またもみじの枝に迎えに来た。この前と同じように、上手に誘導している。前の練習が良かったのか、この日の方が早く、窓を出てばらの枝にうつってしまった。母親は、「さよなら、元気でね」と心の中でさけぶ。みんなもさけんだにちがいない。青木の枝からもみじの枝へと、親雀が左右へからだをチョン、チョンと動かし、けたたましく鳴きながら、先に行って足場を教えては振りかえり、子雀を見守る。隣りの桜の木へも無事に飛びうつった。さて次はどこに行くかと思ったら、右隣りに大きな葉が茂っている泰山木の枝にうつった。葉は大きく茂っているので、チイ子には安全地帯だ。親雀はしばらくそこにチイ子をおいて餌をさがしに行ったようだ。

夕方、親雀はまたけたたましく「チュチュチュチュ」と鳴いた。チイ子の声もした。庭に出て見ると、泰山木からねぐらに帰るところだった。だんだん遠くの木から木へと行ってしまった。これでいいのだと母親は自分に言いきかせ、流れてくる涙をまぎらせた。

K君も姉も、うちの中のみんなが、淋しいけれどチイ子の門出を祝った。

「チイ子、おめでとう」

「よく頑張ったね」

「忘れないで毎日来てね。元気でね」

と、よろこんで送ったが、皆の眼頭には涙が光っていた。

それから毎日、チイ子は庭に遊びに来ては、親から餌を口づけしてもらっているところを見せてくれた。

○

今でも、朝食の時、チイ子に似ている子雀を見ると、K君も姉も、みんなだれからとなく、チイ子のうわさをしてはなつかしんでいる。

（小川幼稚園）